

県中教研 保健体育部会だより

第 39 号

発行日 令和6年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 川口 雅也
題 字 金山 泰仁 先生

保健体育科が目指す資質・能力の育成に向けて

主任指導主事 中村 吉男

中学校学習指導要領全面実施から、3年がたとうとしています。保健体育科では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進し、3つの柱で示された資質・能力をバランスよく育成することを目指しています。

今年度は、研究大会等で、「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指す授業実践を数多く参観しました。男女共習を含め、共生の視点に基づいて、一人一人の違いを認め合い、高め合おうとする姿に、授業者の様々な工夫が奏功していると感じました。また、ICTを活用して、運動やスポーツを「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付け、自己の適性に応じて主体的に運動する様子を見ることができ、先生方のよりよい授業を構築したいという強い思いが伝わってきました。

一方、各種運動の特性に応じた技能や知識等の着実な習得を図ることに課題があると感じました。よりよい授業づくりに向け、教師は、単元で目指す具体的な生徒の姿を明確にもつことが重要です。その姿にたどり着くためには、どの場面で、どの関係性の中で、どの内容について、指導または支援していくのか、生徒の実態を見取り、1時間ごとの学びを想定しておくことが必要なのです。

学習指導要領解説には、各内容のまとめり等において、例が記載されており、それを参考に指導内容の明確化、重点化を図ることが大切です。今、教員一人一人が専門性を高め、効果的な指導方法を追究し、共有していくことが求められています。各地区での今年度の研究成果をよりブラッシュアップして、日々の授業づくりに生かしていただければと思います。

最後に、各種の運動がもたらす健康への効果や心の健康が運動と密接に関連していることを実感しながら、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育ていけるよう、研究活動を推進していかれることを期待しております。

(西部教育事務所)

「不易」と「流行」

部長 川口 雅也

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現のため、ICTの積極的な活用が求められ、1人1台端末が整備されました。導入から2年が経ち、各地区ではICTを積極的に取り入れる授業研究が行われました。グループでの話し合いの場面で、運動の様子を撮影した動画を基によりよい課題解決の方法を見いだしたり、クラウド上にアップロードされた運動例から、課題に応じた運動を選択できるようにしたりする実践が提案されました。

また、平成29年改訂の学習指導要領では、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図る。その際、共生の視点を重視して改善を図る。」ことが示され、男女共修による学習の機会の充実が求められています。各地区では、体づくり運動やダンス、柔道等の単元において男女混合のグループによる学習活動の実践が提案されました。

今年度の研究を進める中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るためのツールとしてのICTの有効な活用場面や活用方法について、また、単なる男女差のみならず、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の授業展開について新たな課題が明確となりました。

今後は、時代を超えて変わらない価値ある教育の「不易」を大切にしながら、時代の変化とともに柔軟に対応する「流行」をバランスよく融合させながら、保健体育科学習を通して心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成ができるよう、ひいては、誰もが自分らしく生きられる社会の実現を目指して研究を進めていきたいと思っています。

(南・福野中)

第67回 研究大会の取組

新 川 地 区

(中・上市中)

2年 球技「サッカー」

指導者 寺下日陽里

「パスをもらうためにはどうしたらよだろう」を学習課題に、2年生のサッカーの授業が提案された。授業の導入では、ホワイトボードとマグネットを活用し、パスが通りにくい状況を設定して、いくつかの具体的な動きの例を提示し確認した。その後、空いているスペースを見つけて動くことやフリーの状態の仲間を見つけてパスを出すことをねらいとし、4ゴールゲームを行い、チームの動きの確認や作戦を考えた。チーム毎にホワイトボードや学習カードが準備されており、話し合いを深める手立てとして有効であった。



部会協議では、授業のねらいに沿った授業展開の工夫や活動場所の工夫について話題になった。今回の授業のねらいに即した各校での実践例が示され、積極的な意見が交換された。

峠修一主任指導主事（東部教育事務所）より一人一人の自己有用感を高める授業を目指すために、話し合い活動において、聞き合う場から話し合う場への転換や男女共修に伴う技能差を考慮したルール設定の工夫、良好な男女の関係性を築くための心理的安全性の確保が重要であること等についてご助言いただいた。

授業力向上アドバイザーの佐藤豊先生（桐蔭横浜大学）より、『生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する体育指導を目指して』と題した講演では、「共生」の視点をもった授業展開や指導の工夫を、具体例を挙げながらご教授いただいた。

中西 勇太（下・朝日中）

富 山 地 区

(富・南部中)

1年 武道「柔道」

指導者 千坂 誠

「自分なりの抑え技を考えよう」を学習課題に、抑え込みの3条件を満たすための効果的な技のかけ方を、グループで見付けだすことを目標に授業が展開された。

各グループでは、1人1台端末で撮影した動画を見ながら、積極的に意見交流する姿が見られた。



終末では、各グループの学びについてジャムボードを活用し、クラス全体で共有する場面があった。グループで気付かなかったポイントを知ることができ、次時へつながる振り返りとなった。

大菱池仁子指導主事からは、「活発なコミュニケーションが図られ、対話を通じた協働的な学びが成立し



ていた」「共生の視点に立ち、互いの違いを認め合いながら課題解決に向かう姿勢が身に付いている」などと講評していただいた。

また、「一人一人が自己の学びを実感できる振り返りの工夫」「評価規準を明確にした授業づくり」等について助言をいただいた。

部会協議は、部員全員が1人1台端末を持参し、授業と同様に「自分の意見を整理」「グループで意見を協議」「全体で意見を共有」という流れで行った。ICTを活用したことで、活発な意見交換がなされ、私たち自身が、主体的・対話的で深い学びを実感できる研究大会となった。

上田 隆徳（富・藤ノ木中）

第67回 研究大会の取組

高岡地区

(高・高陵中)

3年 ダンス「現代的なリズムのダンス」

指導者 椿原 雅史

「それぞれの違いに応じた動きや踊りで、誰もが楽しめるダンスにしよう」を学習課題として、ダンス(3学年男女共習)



の授業が提案された。男女が自然に手をつなぎダンスをしたり、一人一人の生徒に応じた細やかな声かけがあったりと、共生の視点での授業実践であった。

今回の授業は、「全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」へ応募参加するという単元の最終ゴールが設定されており、生徒は意欲的かつ主体的に授業に取り組んでいた。また、Microsoft Swayを動画の全体共有や相互評価活動に使用することで、すぐに各グループの成果や課題を明確にしたり、グループ内外の生徒同士でアドバイスをし合ったりすることができ、生徒の深い学びにつながっていた。



部会協議①では、生徒の活動の様子、共生の視点、タブレット端末の利用方法等から協議を行った。「男女が手をつなぎ楽しくダンスをしている姿がとてもよかった。」「一体感や緊張感を伝えるためにも、相互評価は実際に人前でダンスをすればよいのでは。」などの意見が出された。松嶋智主任指導主事(西部教育事務所)からは、学びは一人のものではなく、互いの違い、互いのよさを認め合える場面を意図的に設定することが大切であるとアドバイスをいただいた。

部会協議②では、「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する体育指導を目指して」という演題で、佐藤豊教授(桐蔭横浜大学)から講義をしていただいた。保健体育の必要性や豊かなスポーツライフの実現について、授業の実践例や学習指導要領の解説等から詳しくご指導いただいた。

石野実加子(氷・北部中)

砺波地区

(南・福野中)

3年 体づくり運動

指導者 齊藤 朋文

「健康に過ごすために必要な運動計画を立てよう」を学習課題に、3年生の体づくり運動の授業が提案された。「力強い動きを高める運動」、「柔軟性を高める運動」、「巧みな動きを高める運動」、「動きを継続する能力を高める運動」からそれぞれ1種目ずつ組み合わせ、計4種目のサーキットトレーニングを考えた。各自が立てた運動計画は、ペアの相手が実践した。ねらいに沿った運動になっているかなどについて意見交換し、運動計画の修正や改善を図った。また、指導者がタブレット端末のアプリを活用して多くの動画を提示することで、運動経験が少ない生徒も選択することで運動計画を立てやすくなった。さらに、各種目の負荷の程度を示すことで、ペアでアドバイスし合う際の参考になり、話し合いの内容が深まった。



部会協議では、生徒の活動の様子を基に話し合い、「保健分野と体育分野を関連付けた指導」や「ICTの有効な活用の仕方」等について多くの意見が出された。中村吉男主任指導主事(西部教育事務所)から、アプリを活用した運動例のように、「動きのポイントを視覚的に示すなど、知識と技能を関連付けて指導することは、それぞれの習得に一層効果的であること」、「評価を生徒の学習に生かすために、生徒が目指す姿を明確に設定することと、教師の指導の改善に繋げることが重要であること」等の助言をいただいた。

大西 将也(砺・出町中)



研 修 報 告

報告者 富山大学教育学部附属中学校
 鶴飼 雅信

令和5年11月1日(水)～11月2日(木)、第62回 全国学校体育研究大会山形大会が開催された。本年度は、大会主題を「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて～3つの資質・能力をバランスよく育成する体育・保健体育学習の在り方～」として、全体会と分科会が行われた。

全体会では、スポーツ庁政策課・教科調査官塩見英樹先生より、「体育・保健体育を通じた子供たちの確かな資質・能力の育成～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」というテーマで解説をしていた。解説は大きく2点についてなされた。

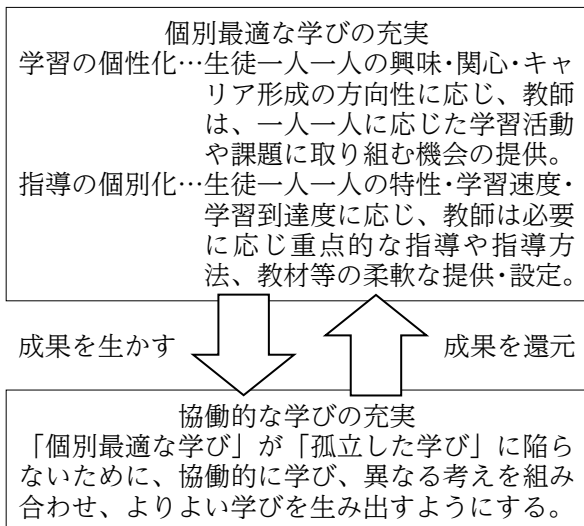
① 学習指導要領の趣旨

令和の日本型教育が打ち出され、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」ということが強く全面に打ち出された。そのためか、「主体的で、対話的な深い学び」ということが、大げさに言えば過去のもののように捉えられているのではないかと、多くの実践を見て感じることもある。しかしながら、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」と「主体的で、対話的な深い学び」はつながり合うものである。

現行の指導要領が、全ての校種で実施されるようになった。およそ10年ごとの指導要領の改訂のスパンで考えるともう折り返しを迎え、次の指導要領に向けて動き出す時期が来ている。今一度、現行学習指導要領の理解を深め、着実な実行が大切な時であり、その上で新たな課題が見いだされなければならない。

② 個別最適な学びと、協働的な学びの一体化

個別最適な学びと協働的な学びの、それぞれを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善つなげていってほしい。



分科会は、山形市立第五中学校で、第8分科会に参加した。山形市立第五中学校では、保健体育研究主題として「3つの資質・能力をバランスよく育成する保健体育学習～仲間と協働しながら課題解決を目指す学習活動を通して～」を設定し、保健体育科教員全体で研究を進めている。同校では、カリキュラムマネジメントの視点も含めた卒業を見通した単元計画を実施しており、特に3年生は、単元計画を自分たちで考え、方向性を決めて学習を進めている点が興味深い。そうすることで、生徒は、自分たちの学ぶ目的、学び方について、主体性をもつことができる。これは、学習の個性化や指導の個別化の実現を意図したものであると感じた。

公開授業では、第3学年・武道／剣道の授業を参観した。学習課題は、「相手を尊重するなどの伝統的な行動をする場面で、よりよい所作について、自己や仲間の活動を振り返ること(思・判・表)」であった。

武道の学習の中で、伝統的な行動をする場面は、主に相手との礼やその前後の所作になるが、その意味について考えながら試合中心の授業をすることに、最初若干の違和感をもった。試合中は、誰でも打つことや勝敗を意識するものだからである。しかしながら、生徒たちの試合直後の話し合いでは、「自分の全力で正々堂々戦うことが相手に対する礼儀である」や「相手の体を打たせてもらっているからこそ心からの礼が必要」といった意見が聞かれた。これは、所作を単なる行動ではなく、その背景にある伝統的な考え方に学びを深めている姿である。

学びが深まっている背景の1つとして、先述した学習の進め方や目的を生徒自身が考えていることにある。生徒自身が、主体的に武道の学習のねらいや進め方に関わることによって、伝統的な考え方や動きに魅力や必要感をもてていた(学習の個性化)。

また、もう1つとして、教師は教材を柔軟に捉え、性別や体力の違いが、学びの妨げにならない工夫をしていることが挙げられる。本授業では、写真のように、軽くて痛みのない道具を使い、どの生徒も自分のもつ力を存分に出し切れるようになっていく(指導の個別化)。

このような工夫の上に立ちながら、生徒同士が関わり合う学習をマネジメントする力がこれからの私たちに、より必要になってくると感じた。また、知識・技能に偏りがちな体育の学習において、計画的に3つの資質・能力を高めるカリキュラムを組むことの重要性を教えていただき、有意義な学びとなった。

